スポーツの実践研究活性化プロジェクト

スポーツイノベーション推進機構　スポーツパフォーマンス・コーチング部門

事業概要

スポーツパフォーマンス・コーチング部門の兼任教員が専門とする種目を対象に，選手のパフォーマンス向上に向けた取組を取り上げ，実践研究（スポーツパフォーマンス研究）として論文化していくことを目指す．本プロジェクトでは特に選手個人のパフォーマンスの向上過程を各種データから継時的に確認するとともに，その取組の意義を形式知化し，それぞれの形式知をもとに類型化・一般化を試みることで，スポーツのパフォーマンス向上につながる類型的・一般的な知見の蓄積を図る．
さらに各種目での実践の論文化（形式知化）から，スポーツパフォーマンスやコーチングの類型化，一般化を目指して，どのような観点で整理できるのか，どのような共通点を見出せるかなどについてプロジェクト内でディスカッションを行い，実践研究の成果をもとにした教育への循環につなげることを目指す．
さらに令和7年度はスポーツパフォーマンス部門の成果の発信をテーマとしてシンポジウムを開催し，本学の蓄積してきた実践研究に関する知識の発信を行う．
本ポスターでは野球，コーチングにおいて実施したプロジェクトならびに2026年3月に開催されたSPORTECスポーツパフォーマンスフォーラムin鹿屋体育大学の内容について紹介する．

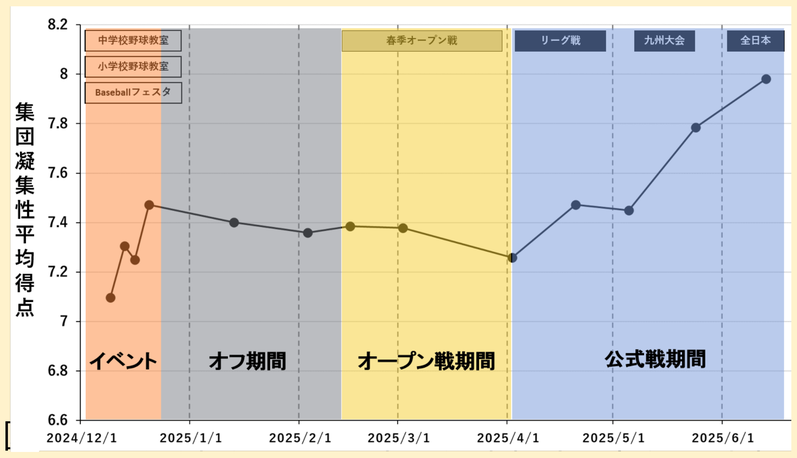
研究成果・実績

藤井・鈴木（2026）大学野球チームにおける集団凝集性の変化に関する縦断的研究．コーチング学研究，39(2)，155-163.

【目的】
大学野球チームの集団凝集性（結束力）の変化を追跡し、活動内容との関連を検討する。

【方法】
大学野球部員56名を対象に、約半年間で質問紙調査を13回実施。4つの活動期間における得点の変化を比較した。

【結果】
・全体平均は7.10点から7.98点へ上昇した。
・イベント期間に上昇し、オフ・オープン戦期間にはわずかに低下した。
・公式戦期間に最も大きな上昇が見られた。

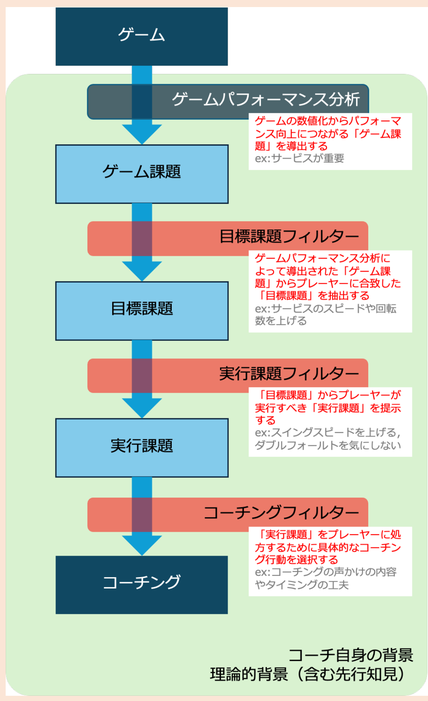


【考察】
部員によるイベントの企画・運営や、全国大会出場という成功体験の共有が、結束力の向上に関係した可能性がある。一方、オフ・オープン戦期間には、交流機会の減少やチーム分割、選手選考が結束力の停滞に関係したと考えられる。

【まとめ】
集団凝集性は、活動内容やチームの状況に応じて変動する。勝利経験に加え、部員が主体的に協働する機会づくりが重要と考えられる。特に交流が減る時期や選手選考期には、対話や役割の共有を意識したチーム運営が求められる。

髙橋ほか（2026）ゲームパフォーマンス分析とコーチングを繋げる解釈の過程．鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構学術研究ジャーナル，1，1-6.

ゲームパフォーマンス分析によってゲームの特徴や課題を明らかにし，コーチングによって選手の課題を克服することに努めることで，ゲームパフォーマンス分析とコーチングは直接的につながった活動であるとも考えられる．しかしながら，ゲームパフォーマンス分析から導出される課題とは量的な観点からの分析による結果であることから，ゲームパフォーマンスを向上させるための指針となるようなものといえる．一方でコーチングの現場では，コーチは一人一人のプレーヤーに対峙することから，プレーヤーの特性を踏まえたコーチングを行う必要がある．ここにおいて，コーチはゲームパフォーマンス分析の結果とコーチングを繋げる解釈の過程を経る必要が出てくる．この関係性を図示すると，下図のようなものになると考える．



左図のようにプレーヤーがパフォーマンスを発揮するゲームを起点に，筆者らの専門とするゲームパフォーマンス分析からコーチングに繋げる関係性には，その間にいくつかのフィルターが介在していると考えられる．この解釈の過程を現場のコーチングの改善に繋げるためには，コーチ自身の背景に基づくバイアスや，目標課題，実行課題の適切さなどを検討する際に，解釈の過程の各段階に存在するフィルターがどのように働いているかを考えることで，自身のコーチングを振り返ることができる．

一方，研究に活用するためには，ゲームパフォーマンス分析で取り上げる内容をゲーム課題につながるものにすることや，コーチング行動を研究するにあたっては，具体的な行動は解釈の過程を経たものであり，その解釈の過程についても検討することで，コーチング行動の意味を理解することにつながるだろう．

この解釈の過程は，コーチ自身が無意識に用いているものであるといえるが，この解釈の過程の存在を意識することで，ゲームパフォーマンス分析を有益にコーチングに繋げることができるだろう．

2026年3月15日（日）に，「SPORTECスポーツパフォーマンスフォーラム in 鹿屋体育大学」をZoomによるオンライン形式で開催した．

本フォーラムでは，SPORTECスポーツパフォーマンス研究センターの研究設備紹介，スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門の今後に関する鼎談，研究成果と現場をつなげるためのパネルディスカッションを実施した．

特に，研究設備紹介では，50mフォースプレート，モーションキャプチャ，トラックマンテニスレーダー等を取り上げ，スポーツパフォーマンス計測に対応する研究設備の活用方法を発信した．


SPORTECスポーツパフォーマンスフォーラム
in 鹿屋体育大学

プログラム

<13:30～13:40>　開会挨拶
前田 明 氏 国立大学法人鹿屋体育大学理事・副学長

<13:40～14:00>　SPORTECスポーツパフォーマンス研究センターの研究設備紹介
（50mフォースプレート，モーションキャプチャ，トラックマンテニスレーダー等）

鈴木 智晴 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門特任助教
大澤 啓亮 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門特任助教
平野 智也 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門特任助教

<14:00～15:00>　鼎談『鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門に期待すること（仮）』

武隈 晃 氏　鹿屋体育大学監事
前田 明 氏　鹿屋体育大学理事・副学長／スポーツイノベーション推進機構長
髙橋 仁大 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門長／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系教授
小森 大輔 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門兼任教員／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系准教授

<15:00～15:10>　休憩

<15:10～16:20>　パネルディスカッション『鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門が発信する研究成果と現場をつなげるために（仮）』

藤井 雅文 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門兼任教員／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系准教授
成田 健造 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門兼任教員／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系講師
前村 かおり 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門兼任教員／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系助教
笠原 政志 氏　国際武道大学教授

<16:20～16:30>　閉会挨拶
髙橋 仁大 氏　鹿屋体育大学スポーツイノベーション推進機構・スポーツパフォーマンス・コーチング部門長／鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系教授

今後の事業の展望

令和7年度は令和6年度と同様にスポーツパフォーマンス・コーチング部門の兼任教員が行っている各種の実践研究をサポートする形式で本プロジェクトを実施した．研究成果も着実に残していることや，学会大会等での講演やパネリストなども担当していることから，このような形式での事業の進め方が適切であったと感じた．
令和8年度も本事業を継続することとし，令和7年度と同様にスポーツパフォーマンス・コーチング部門の兼任教員の実施している実践研究をサポートする事業という位置付けで展開するとともに，フォーラム等でその成果を発信していくことを計画している．